北の旋律

ある夏空

いとおしい程に輝く

北国の空

急上昇する積乱雲

四つの季節

死にもの狂いの

収束する宴

本物の季節は

これから忍び寄る

青く発光するのは

人々に迫る

偽りの夏空

冷たい空気の中

凍てつく生命への

諦念にも似た

一つの乱反射

渡し舟

無人駅の窓のはずれた

待合室のような

俺のからだ

帰って行く場所を

とっくに捨て去った

かすれた夏の風が

どんどん飛んで行く

北の町も

夕暮れに姿を現わす

傾いてしまった星座たち

その下に

黒く広がる北の緯度

別れの言葉は

とうに

凍る化石になっている

薄目を開けて見る

俺の中の地下通路

時を壁に固定したまま

いつまでも変形しない俺が

両腕をかかえて

どこまでも下降して行く

現在形のまま語る

俺の中の

想い出話よ

人の横顔にだけ

想いをたたきつける

俺の優しすぎる言葉の群よ

明日への渡し舟は

合歓の制限地獄

櫓をからませたまま

お互い目を剥いて

ぎしぎし音をたてながら

ゆっくりと回転する

共有

太陽の光と重量が

ほのかに匂ってくる所に

俺達の青い土地がある

疾走して行く

たて髪の薄い馬のように

記憶は流線型に縮む

微笑を浮かべた

ずるそうな顔で

俺達は忘れようとする

北の町の歴史を

週末ごとの仲間の酒に

胃を重く揺らしながら

北の土を不透明にする

肩を陽気にたたきあって

つま先で一日のしびれを

際限のないあやとりで

夢中にくるませる

俺達は一体誰だったのか

耳に残る言葉は

一人一人のものではないのに

雨の日さえも

何かを共有しようとする

安スナックの

吐き気のする連帯感よ

黒くとぐろを巻く

長い道のりの明日が横たわる

ふと思い出す

北の緯度

酔いの狭間に

足元で冷たく収束するのだ

　　馬

馬は秋の草原に佇ずむ

押し寄せてくる

風の中で眼をつむる

忘れようとしても

忘れることのできぬ言葉を

疲労で重くなった足で

踏みつぶそうとしている

燃えすぎた薪の呻きのように

夏の間中飛び跳ね回っていた

あの言葉たちは

一体どこに消えたことだろう

青い空が

こめかみを圧迫するので

馬は優しく眼を開ける

なだらかに起伏する丘は

駆け続けて来た時間に似て

踏みつけた瞬間

丘の感触を喪う

太陽の熱で

恥ずかしいほど熟した地面に

激しく蹴りつけた快感を

馬は乾いたたて髪で確かめる

汗の結晶が鋭どく肌にしみ込む

日毎に濃くなっていく

空気の中で

馬は耳をすます

これから忍び寄る季節の

沈黙の告白を聞くために

ゆっくりと頭を下げ

めざわりな黄色の草を食む時

馬は

四肢の筋肉を緊張させて

薄日の当る冬の河原に立つ

自分の姿を

濡れた瞳に映す

休火山

町には季節が

美しく静止している

霜の降りそうな

薄紫の朝に

寝苦しかった

夜の痛みをこらえているのは

僕だけだろうか

毎日の風景が

通勤バスの窓ガラスに映って

遠く運ばれて行く

冬の準備を

一つの儀式にしたのは

いつからのことだろう

指先で疼くのは

真夏の懺悔だろうか

それとも

冬囲いの冷たさに傷ついた

黴臭くなった生活だろうか

収穫の宴が置き去りにされた

機械油のしみ込んだ田んぼが

ゆるやかに消えるあたりに

今日も

稜線を激しく空中にさらす

休火山が迫る

新しい季節

流れ落ちてくる冷気は

収穫の空白を充足させる

年に一度の

妙に限られた運命

少し前まで

けだるく乾燥した夏を

しっかりと養っていた

この盆地は

濃くなっていく空気の中で

ひたすら

新しい季節を讃える

移っていく時の中で

俺達は

定まらぬものに

美を感じすぎたかもしれない

一つ一つの季節に

信頼の挨拶を送るには

あまりに淋しい土地に住む

倒れやすい俺達

刈り取られ

束ねられ

積み上げられた

力強さの証しの背後に

執拗に迫りくる

厳しい記憶がある

季節風

昼の厳しい傷口に

立ちすくんでいるのは誰か

移り気な風に吹かれて

気を変えてしまうことほど

愚かなことはない

時の静止した午後

公園では風も

自分の存在に震えている

さあ告げよう

冷たいけれど

気迫のこもった言葉を

僕は自分を食べつくしたと

今の太陽は陽気な者達とも

無縁の事実だ

逃げ道を自ら断ち切る

冬のやって来る証しだ

お前は一体どれほどの冬に

自分の胸の町を通過させたのか

数学者はとっくに

記号の荒海に出航してしまった

そして僕らは

自分の精神計を酸化させる

薄いコートの内側に

使われぬ言葉を隠す癖は

もうやめてしまおう

現代の武器を持たぬ僕ら

退化した目配せの背後で

凍りついていく高層ビルの群

冬の朝日に白く輝く

鋭い言葉を捜そう

寒い黄昏に似合うのは

ささくれ立ったイマジネーション

赤い目盛りの温度計は

木枯しの間で

息をつまらせている

北の町の都会訛りよ

印刷された言葉の

不安げなシンメトリー

僕らはいつの間にか

緯度を忘れてしまった

そのくせ瞳だけは

渡り鳥のように

妙に冷ややかに濡れ

時には北斗七星を

鮮明に夢見る

白い色を燃やせ

透き通った氷を濁らせよ

張りつめすぎた青空を

弛緩させよ

全てを

見過ごしてやって来た僕ら

ページの抜け落ちた

歴史の教科書を

季節風の中にばらまこう

終宴

盆地の隅々にまで

日ごとに張りつめていく

小気味良く乾燥しきった

青い空

かすんでいくのは

冬を自覚している

従順な木々の群ではなく

俺達の虚ろな瞳

静止を忘れた夏に

この土地の上を

笑顔を見せて

駆け抜けて行った旅人達

輝かしい挨拶を

俺達はかみしめていた

胸の中にきっちりと

しめつけていたのだ

豊穣の土地は

飢えを忘れた野良犬のように

流れていく空気の中で

一つの終宴を始める

収穫の安息を忘れ去った

哀しくなるほど

幸福すぎる俺達

祭りはひどく遠い

北の旋律

雪の中で俺は生まれた

吹雪は歴史の前奏曲

だが一つの旋律を作るには

あまりにも修飾的だった

歌うように過ぎていく

楽観的な三つの季節の隅で

時の自叙伝を書き始めたのは

償う果てを忘れた

凍りついた罪だったのだろうか

気づかずにいると

北の針しか持たぬ

俺の磁石は

真夏の寂しい光の中で

堅く南を見つめてまま

永遠の体温を忘れる時がある

抽出された夏空は

北の海の旋律を

厳しい音調で伝えるのだが

黒ずんだ鳥達が

まばらになった羽を

記憶の中で確かめる

重く堆積する北の林

季節に残された浮彫りだ

どうしても

語りかけずにはいられない

風の道の傍らで

俺は乾きすぎた

上着のボタンをかけて

書き残された自叙伝を

懐かしく読み始める

宿命

ひっそりと恥じるように

雨が降っている

青すぎる自分の影におびえる

性に目覚めた少女のように

町は内から濡れていく

花びらなど

どこにも漂わず

黒い肌を硬直させはじめた

木々は

沈黙と忍従の喜びを内在させて

冷たい雫を足元に垂らす

鋭く透明になっていく

硬質のしぶきの向うに

進んで行く道があるのだろうか

季節を敏感に抱擁する

間の抜けた町は

恐ろしいほどの生活の重みを

幾重にも　幾重にも

傾けてくるのだ

この盆地を流れる川が

海には想いを流さず

気がつかぬうちに

元の川岸に身を

こすりつけるように

俺達は冬を背負ったまま

息を吐き続けていくのだろうか

群青の黄昏が

予測された　生活の

けだるい暖みであるとしても

屈辱の喜びに身を焼いて

あっさりと束ねられる

稲

なす術を喪失してしまった

豊穣の土地の回り舞台が

軋みを増していく

そして　再び

透明度を加えすぎた季節が

激しく

襲って来るだろう

視界

吹雪の去った後で

僕達は何を

眺めればいいのか

遠い雪けむりの山に

哀しみの変奏曲が

所かまわず雪崩れる

　枯れた霜の木立

青空は

誰のためにあるのか

行方の分らぬ

優しすぎる恋人のように

群青の黄昏に

食われて消える

　明日は雪あらし

凍てついた朝の轍

滑る視線に

投げだしたくなる生活が

甲冑の淋しさをぶら下げる

　捨て去られた流氷

遠くにかすむ

うす青の休火山

後退する純粋さに

いつまで耐えるのか

裏切りの夕映えに

既に身をこがしている

　朝日にきしむ霧氷

冷たく肌を切る風

いつまで隠れたままなのか

僕達は

どうしても見つけ出せずに

手を振り続ける

　空気をふるわす氷の壁

雪に流された一つの視界

自分の影におびえながらも

いつか

撃たなければいけない

僕達の明日

寒さが肌にしみ込むある夜

ふと

ゆっくり波打ち輝く海が

すぐ近くに見える路地を

ぼんやりと

夢見てしまうことは

一つの罪だろうか

おお僕達は

人生の半分を一つの季節で

冷たく縁取りする

充血した胸の中で

一本の針が

さめた音をたてはしないか

寒さが背中の辺りで

幾重にも沈黙する夜ふけ

都会の陽の当る

薄汚れた歩道と

コンクリートの壁の鮮さを

何度　反芻したことだろう

寒さが異なるから

言葉までが違ってしまう

暖い柔らかな窓辺で

遠くを眺める

冬を持たない旅人達よ

あなた達が旅をしたのは

一体いつのことですか

粗い岩肌の間で

ふつふつ泡立ち砕ける波を

いつから

優しいスナップ・ショットに

切り取ってしまったのですか

遠くで凍る海鳥の鳴き声

出会いの挨拶も風に吹き飛ぶ

僕達の若い腕は冷えている

今まで見過ごし

これからも見過ごしてしまう

時間の景色

隙間の多すぎるガラス窓に

まだ産毛の生える頬を押しつける

僕達には始めから

喪うものなどなかったのだ

今にもひび割れしそうな目をして

喪ったふりをしてきただけだ

僕達の方形の視界の片隅

歴史は教科書の中で

遠く静止している

雪が無表情に降り出す頃

重くなった寝具の谷間で

薄目を開けて夢見る僕達

明るい路地

金色の海

透きとおりすぎる青空

手を擦り合わせる僕達の明日

醒めた夜

果てしなく続いた雪下ろしの後

どうしようもない

眠れぬ夜を過してしまう

容易に気温のあがらぬ昼の

妙に清潔な空気に

しぼんだ切首のような生活が

膨らみ始めたのかもしれない

落された雪たちが

闇の中で発光する

自由自在に姿を変えて

アメーバのようにしぶとく

楽観的なオンナの口元のように

気が遠くなる程冷たい

肩先を部屋の冷気に漂白させ

吐き出してきた数々の

頼りない言葉に番号をつける

丁寧に数えているうち

落された雪たちが

少しづつ揺れ動き出し

軽いが粘りのある摩擦音が

大きな波になって壁を貫く

こんな現象には

俺は全く無力になる

あるいは

全く無力にならざるをえない

どんな不味い酒を飲むよりも

絶望的な覚醒が胸の辺りに

重くのしかかる

部分的に熟した寝具の中で

ささくれ立った手が動き出す

堅いスコップを握った手が

何かの予感に舌打ちするように

再びやって来るはずの雪の朝を

明確に丸めてしまうかのように

雪明りのために

息苦しく夜の去った部屋に

雪たちの不安の存在が

美しく盛り上がる

目覚め

氷点下の朝に

俺は秘かに目覚める

昨日は存在したのか

今日は存在し続けるのか

苦い疑惑が

体臭のしみた床の中を

分解写真の哀しみで

反転をくりかえす

薄青の氷の壁に

俺は何を映したのか

壁の向うを

ちぎれた服をぬぎ捨てた

蒼ざめた俺が走って行く

駆け抜けることが

存在の証しだったとは

飛び立てぬ小鳥の

懐しい傲慢

記憶の一つ一つを

裏返してみることに

倒れそうになったまま

黄昏れていく雪を

いつまで見つめるのか

凍てついた季節に

生活の隠された意義を

見つけ出せはしないのか

夢の中で始動する

未払いの自動車たち

かまくらを掘り進む時の

充実した雪明かりに

既に気づいているべきだった

雪だけが

生活の重力でなかったはずだ

まとわりつく冷気を

かすむ射程に入れる日は近い

始まり

花が急に散る頃

北の海はいつになく泡立ち

捨ててきた季節は

荒れた砂浜でなめらかになる

太陽の光が

一日ごとに影を深める時

雪は溶けてしまったのか

僕らの湿った心の中で

けだるく目を覚しはしないか

暖い夜の消える朝

霜がひそかに

郵便受けの中で

美しすぎるくらい

咲きはしないか

物が皆白くなっていく季節に

風に乗って流れていく

水蘚のような言葉たち

微笑する頬に

淋しすぎる戦慄が

駆けはしないか

古い地図のように

毎日の平面に立つ僕ら

風向きが変わるたび

簡単に緯度を忘れる

小刻みに震動し続ける

逞しい筋肉を持つ人たち

かみ切ることのできない

柔らかい季節の果てで

マッチ箱の雄叫びを上げる

葉が寒々と散る頃

雪の近い明日に眉をしかめる

あとがき

　この詩集には、一九七五年から一九七七年までに書いたものの中から、十五篇を収めた。本当にちっぽけな詩集である。

　東北地方のさらに北の町で、ポツポツ詩を書いてきて、こうやって詩集をまとめることができたのは、平凡に暮している自分にとっては一つの事件なのかもしれない。

　もしかすれば世の中には絶対に役立ちそうもない詩を書き、こうして詩集にまとめる、というのは何故だろう。寺山修司は、彼の著書である「戦後詩」で次のように言っている。『われわれは「現代」という無人島に棲んでいる。それはわれわれがそうすることを「選んで」そうなったのである。そこで、われわれは、ここにひとり生きている人間がいることを大洋の彼方に報告する義務がある。』自分の場合だってそうかもしれない。無人島から空ビンにつめて流してやる、助けを求める手紙は、決して届かないかもしれない。だが、きっといつか、と思いながら書いているのだ。単に自己救済のみを目的とするのではなく。

　この北国という無人島で。

　最後に、この詩集をまとめるにあたり、何から何までお世話くださった、北譜舎の藤島和義氏、応援してくれていた友人のＳに心からお礼申し上げたい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一九七七年夏　　　　成　田　豊　人